

口絵 1



テル・エル・ケルク出土の連続人物像が描かれた彩文土器片

A potsherd decorated with a series of painted human figures, from Tell el-Kerkh, northwestern Syria

ここで紹介する彩文土器片は、筑波大学とシリア文化財博物館総局が共同で実施している北西シリア所在のテル・エル・ケルク遺跡の2010年度の発掘調査で出土したものです。テル・アイン・エル・ケルクの中央部に設けられた発掘区のうちE251区の第3層下部の覆土中より出土しており、これは私たちが編んだ地域編年ではルージュ2d期初頭に当たります。¹⁴Cによる絶対年代では紀元前6000年前後になると考えられ、広域編年では土器新石器時代終末からハラフ形成期に相当します。

彩文土器片は約5cm四方が残された小さな破片ですが、赤褐色の光沢をもつ外器面に非常に珍しい連続した人物像が鈍いオレンジ色で描かれています。人物像は両腕を肘で折り曲げていて、右手は胸に置かれ、左手は大きな植物のようなものを掲げています。長い髪の毛を襟足近くで結んでいるようにも見えます。足の方向から判断すると人物像は画面上で左から右へ、並んで踊りながら反時計回りに進んでいると思われます。

並んで踊る人物が描かれた彩文土器は、いずれも小さな破片ですが、テル・ハラフ（Oppenheim 1943, Pl.LX:2）やヤリム・テペII（Merpert and Munchaev 1987, Fig.21:7）、テル・サビ・アビヤド（Akkermans 1989, Fig.IV.43:349; Akkermans and LeMière 1992, Fig.21:40）といったいくつかのハラフ期の遺跡から報告されています。腕を肘で折り曲げた姿勢や反時計回りに踊りが進行している構図など、ケルク出土の人物像と共通する点が多々見られます。これらは何らかの儀礼や祝宴の場面を表していると考えられ、当時の社会にとって儀礼や祝宴が重要な役割を果たしていたことを暗示すると思われます（例えばNieuwenhuyse 2006:252）。ケルク出土の人物像は他の遺跡出土の人物像とは片手に植物らしきものを掲げている点が異なっています。この植物は茎が立っていて穂が垂れているところからコムギを表現した可能性があり、踊りで祝されているのが収穫祭であったことを示唆する貴重な例と言えるかもしれません。

（常木 晃）

Akkermans, P.M.M.G. 1989 *Excavations at Tell Sabi Abyad, Prehistoric Investigations in the Balikh Valley, Northern Syria*. BAR International Series 468, Oxford.

Akkermans, P.M.M.G. and LeMière, M. 1992 The 1988 excavations at Tell Sabi Abyad, a Late Neolithic village in northern Syria. *American Journal of Archaeology* 96:1-22.

Merpert N.Y. and Munchaev R.M. 1987 Earliest levels at Yarim Tepe I and Yarim Tepe II in northern Iraq. *Iraq* 49:1-36.

Nieuwenhuyse, O. 2006 *Plain and Painted Pottery*. PhD. Dissertation, Universiteit Leiden.

Oppenheim, M.E.von 1943 *Tell Halaf I: Die Prähistorischen Funde*. Walter de Gruyter, Berlin.